

国産材原木流通システムの変化と中間土場の役割

専任研究員 秋山孝臣

1 国産材原木流通システムの変化

(1) 原木市売(いちうり)市場とは

原木市売市場は、生産者等から集荷した原木を保管し、買方を集めてセリなどに向け、最高値を提示した買方に対して販売を行っている。販売後は商品の保管、買方への引渡し、代金決済等の一連の業務を行い、主として出荷者からの手数料により運営している。その数は2011年で465事業所であり、国産材原木流通システムの中核となっている。

(2) 国産材原木流通システムはなぜ変化したのか

a 市売と直送

原木の流通には、素材生産業者が伐採した後、原木市売市場や木材販売業者を經由して製材工場や合板工場などへ流通していく市売の場合と、素材生産業者等が伐採現場から工場へ直送する場合などがある。

全国規模で見ると、直送が徐々に増加しており、原木市売市場を通じて流通した国産材と工場へ直送した国産材の量は、11年ではほぼ同水準となっている。

b 消費者ニーズおよび原木流通システムの変化

我が国では、従来から木造住宅への志向が強く、かつては和室の柱を中心に無節のいわゆる役物(注1)(やくもの)へのニーズがあった。このため、高級な材を選別購入する需要から原木市売市場でのセリ売が盛んとなったが、その後、構造用の役物需要は減少しセリ売のニーズが減った。その結果として、製材業者等が参加し材を吟味する形での原木市売が減少す

るとともに、直送のニーズが増え原木流通のシステムが変化してきた。

2 中間土場の役割

(1) 「中間土場」とは何か

「土場」とは「木材の輸送や保管のために利用する木材の集積場所」であり、中間土場のほか山土場、原木市売土場、工場土場などがある。

山土場とは、山元の伐採現場の小さな集積場(せいぜい数百㎡くらい)であり、製材用優良材からチップ・バイオマス材にわたる細かな仕分けは比較的困難で、流通の拠点となるには機能が不足している。

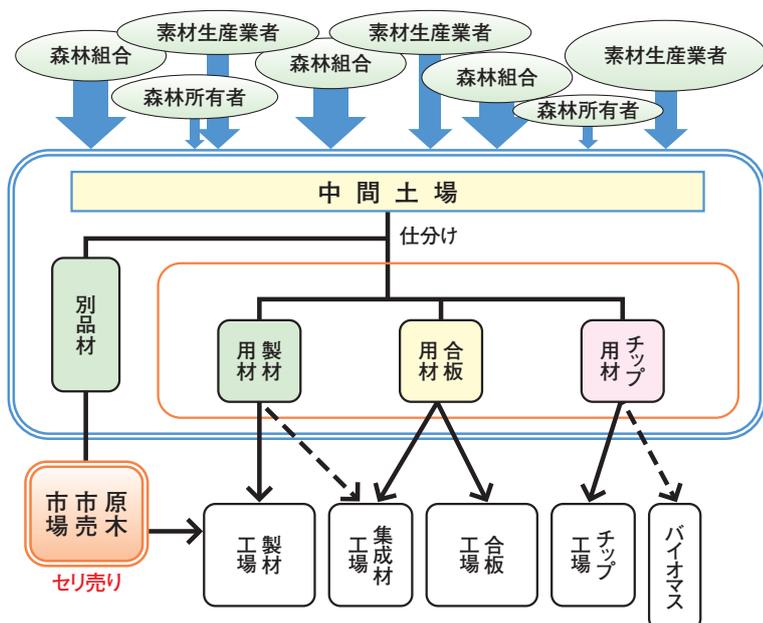
中間土場は、山土場から目的地までの距離が長い場合、その中間に設けられるものである。2000年代になって徐々に増えてきおり、少なくとも全国で数十か所程度あると言われている。

(2) 中間土場の機能

中間土場は、一般に数千㎡程度の広さであり、原木市売市場より山土場に近い場所にある。森林組合・素材生産業者・加工場等が運営主体となり、森林組合などから原木を集荷し、樹種や径級・長さ等によって複雑な仕分けも行う。川上の木材生産者と川下の需要者の間に立ち、流通のコーディネーターとして双方の需給の情報交換を行い、流通の交通整理を行う役割を担っている(第1図)。

つまり、中間土場は、原木流通システムの

第1図 中間土場のイメージ



出典 林野庁「平成27年度 森林・林業白書」

変化を前提に、従来、原木市売市場で市売(セリ売)が果たしてきた流通の司令塔の役割を新たに担う存在として登場してきたと言える。中間土場の近年の増加は、直送が増加したことによる流通構造の変化のなかで、市売が十分にその役割を果たせなくなったためであるとも言える。

3 中間土場増加の背景

中間土場増加の背景として、以下の点が指摘されている。

(1) 大規模加工場の出現

2000年代の「新生産システム」^(注2)以降、製材工場の大型化や合板工場の設置に伴い、品質が均等な原木を、その時々需要に応じてま

(注1)和室などの室内で表に見える部分に使用される化粧性の高い製材品のこと。

(注2)新生産システムとは、06～10年に行われた林野庁のモデル事業で、全国に大規模製材所を建設し国産材を工場直送により安定的に供給することを目指した。

とまって供給することが求められるようになってきた。従来の原木流通システムではこうした大量調達の需要に対応することが難しくなり、中間土場が登場することとなった。

(2) 原木搬送コスト削減

また、中間土場を通して工場に直送する場合、一般に山土場に比べて大型トレーラ等による輸送が可能となるため、山土場から原木市売市場を通して工場に搬入するよりも、物流コストを削減することが可能となる。

(3) バイオマス材の増加

バイオマス発電の稼働が本格的となり、原料となる木材の集積地として中間土場が重要視されるようになった。

4 課題と展望

中間土場には、今後原木市売市場に代替する機能の獲得が期待される。

第一に、独自の供給網を作ることにより、山から窓口を一本化し、価格交渉権を保持するということである。

第二に、川上と川下、つまり供給と需要のなかで物流のみでなく、金銭授受にかかる与信管理機能も形成し、発展させていく必要がある。

現在、原木流通システムは変化の真ただ中にあり、現状の物流における課題の多くを解決していく機能・役割を中間土場は多分に持っており、次第にその動きが定着していくと考えられる。

(あきやま たかおみ)